

## 追従モードの準備

前号でクロック管理(小節管理)の方法をいくつか紹介しましたが、どれも根気の要る作業です。同じ根気の要る作業なら・・・と言うわけで私の場合市販のMIDIファイルに頼らず全部自分で打ち込んでしまいます。

HCでは前のバージョン(Cakewalk In Concert)と違って楽譜表示という機能が強化されました。この楽譜表示機能もかなり優れているのですが、現状では次のような欠点が見られます。

- 1, 同じ拍に長さの異なる音符があると短い方の音符しか表示されない。
  - 2, 予め調号を指定すると、曲の途中の転調部分で表示がおかしくなる。
  - 3, 三連符以外の連符(五連符など)は正確に表示されない。
  - 4, ト音記号とヘ音記号を音域によって書き換えない。
  - 5, トリルは記号ではなく正味の音符で表示され見た目がゴチャゴチャする。
  - 6, スラーなどのフレーズ記号が表示されない。
- などの問題があります。勿論これらは楽譜表示機能付きとして宣伝している液晶付きの国産キーボードにもすべて共通する問題です。逆にフィナーレ等では表示される楽譜は完璧でも演奏は不完全ということもあります。

このことは、表示されている楽譜を見ながら弾くという所まではまだ想定されていないようですが、初級のピアノ曲などでは楽譜を見ながら弾いても全然問題はありません。

この追従システムでは、鍵盤楽器をソロとして想定していることが多いので、同時に右手と左手の二つのチャンネルをソロの対象とする事ができます。しかし、このHCは若いチャンネル即ちチャンネル1からチャンネル16に向けてスキャンしますので、ソロの対象となるチャンネルは可能な限り若いチャンネルを使用するようにします。実際のオーケストラ譜などでは独奏ピアノは弦楽器の前かティンパニの後ろに書かれていることが多いのですが、それを先頭チャンネルに移動します。そうすることでHCの持つ機能を有効に利用できます。

## マーカーについて

HCの優れた特徴はそのマーキング(MIDIデータに印を付ける)のシステムにあります。自らが優れたソロピアニストでもあるワインストック教授が、その演奏者としての経験から考え出したのがこのマーキングシステムであり、他の似たようなソフトと大きく異なる点でもあるので、これ

が特許になっています。

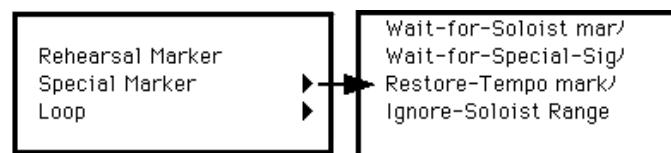
追従システムのための準備の多くはこのマーキングのために費やされます。HCの楽譜はむしろこのマーキングのために使われます。もし、楽譜を使わずに小節番号だけを頼りにすると次のような事が起こります。

市販のSMFでは実際の小節数より多いことがあります。これは最初の小節にMIDIリセットやプログラムチェンジを書き込んで、実際には2小節目から演奏されることが多いからです。また一般的に、弱起の拍で始まる曲ではその拍を含む不完全な小節を1小節目とカウントしません。従って実際の印刷された楽譜の小節番号を見ながらでマーキングをすると1小節ずれてしまいます。

また、多くの市販のMIDIファイルはいきなり鳴り始めて演奏者を困惑させないため2小節の予備小節を前に付け、前奏としてテンポを示すようになっています。

このような状況を実際のデータ楽譜表示させることで回避できるのです。

さて、実際には楽譜の任意の場所(小節や拍)をコントロール・キーと一緒にクリックすると次のようなダイアログが現れます。この左側のSpecial Markerを選ぶとさらに右側のダイアログが現れるのですが、現在4つの選択肢があります。



- 1, Wait for Soloist Mark (ソロの演奏を待つ)
- 2, Wait for Special Signal (特別な信号を待つ)
- 3, Restore Tempo mark (テンポを楽譜通りに戻す)
- 4, Ignore Soloist Range (ソロ演奏を無視する)

これらのマークは同梱のサンプルファイルには付けてありません。演奏者の好みに任されています。

それに対してリハーサルマークや段落のマークはすでに付けられています(変更は勿論できる)

この「ソロの演奏を待つ」という行為はコンチェルトの指揮者が必ず行うことで、「カラオケには絶対できない」ことなのです。この実際のコンチェルトにおける指揮者とソリストのやりとりをマークするのがこのシステムです。

来月号はこの作業を中心に話を進めます。